

特定非営利活動法人(神奈川県認定)  
柔道教育ソリダリティー

第17回講演会

「TOKYO 2020 オリンピック・パラリンピックに向けて  
今考えよう！ スポーツって何？」

テレビ朝日スポーツコメンテーター

宮嶋 泰子

2015年5月28日(木)

公益財団法人 日本外国特派員協会  
メディアルーム

司会…本日は暑い中、またお忙しいところを本当に多くの皆様にお越しいただき、心から御礼を申し上げます。それでは理事長の山下泰裕より、講師の宮嶋泰子さんをご紹介させていただきます。

開会のあいさつ

山下泰裕理事長

(NPO 法人柔道教育ソリダリティー 理事長、東海大学理事・副学長) 皆さんこんにちは。本日はご多用のところ、また暑い中、本法人の17回目の講演会にご出席いただき誠にありがとうございます。



私が現役だった頃、宮嶋さんはテレビ朝日のビッグスポーツという番組でレポーターを務めておられ、よく取材や質問をお受けしておりました。選手時代から大変親しい間柄ということもあり、本日は私が講師のご紹介をさせていただきます。

ご存知の方もおられるかと思いますが、2013年の4月に全日本柔道連盟が私をリーダーとして、日本の柔道界から暴力を根絶するプロジェクトを立ち上げました。このとき、外部の有識者として宮嶋さんに参画をお願いし、これまで一緒に活動していただいております。

実は暴力の根絶プロジェクトは、発足から1年ほどで活動内容と名称を変更しました。暴力を根絶するだけでなく日本の柔道界が良くなる訳ではないと考え、「柔道マインドプロジェクト」と名付けて、礼節を重んじ品格のある柔道界を目指して活動することになったのです。宮嶋さんには現在も、柔道マインドプロジェクト

の特別委員会のメンバーとして活躍をいただいております。また、日本の柔道界が法令を遵守しながら、しっかりと組織として発展していくために、全日本柔道連盟のコンプライアンス委員会でも外部委員として貴重なご意見をいただいております。

さらに宮嶋さんは、日本女子体育大学の招聘教授、順天堂大学の客員教授も務めておられます。今日の講演を私も本当に楽しみにしております。それでは宮嶋さん、どうぞよろしくお願いします。

「TOKYO2020 オリンピック・パラリンピックに向けて  
今考えよう！ スポーツって何？」

宮嶋 泰子



(株)テレビ朝日スポーツ局スポーツコメンテーター、全日本柔道連盟MINDプロジェクト会議及びコンプライアンス委員会メンバー、日本女子体育大学招聘教授、順天堂大学客員教授

山下理事長、過分なご紹介をありがとうございます。今日はお席を譲っていただきありがとうございます。

本日は、オリンピックに関連したお話を予定しておりますが、柔道やスポーツ全般、その他の事柄にも話題を広げようと思っております。ご参加の皆さんには柔道がご専門の方が多いので、私がお話するまでもない内容もあるかもしれませんが、学生さんも聴講されるということで、私も基本に立ち返って改めて勉強するという意味を含めて、お話をさせていただきます。

本日の講演は、2020年に開かれる東京オリンピック・パラリンピックに向けて「今考えよう、スポーツって何？」がテーマです。恐らく皆さんはスポーツについて、「それが何かくらいは分かっている」とお考えだと思えます。けれども、最近の私は考えれば考えるほど、スポーツの本当の原点がどこにあるのか、分からなくなってきたのです。

ロンドンオリンピックで驚いたこと

この写真は、ロンドンオリンピックのメインスタジアムの様子です。陸上競技のハンマー投げの写真で、私は室伏広治選手を取材していまし

た。スタンドにはかなりの観客が詰めかけていますが、実はまだ予選の最中で、時間も朝の9時半から10時頃です。正直、私も驚きました。



翻って1988年のソウルオリンピックの時のことです。やはり陸上競技のやり投げ種目に溝口和洋選手という、世界ランキング2位の記録を持つメダル候補が出場していました。彼はオリンピックの出場に当たり、満員の観客の前で競技する姿をイメージしてトレーニングを重ねていたそうです。ところが本番の予選のスタジアムは観客が数えられるほどの状況で、モチベーションを維持するのが大変だったと話しておられました。

ロンドンの大観衆を前に溝口選手の話の思い出し、「やはりヨーロッパには、人間の身体と、その運動を愛でる文化がしっかりと根付いていて、スポーツを楽しむということが、

子どもから大人まで当たり前のよう  
に出来るのだな」と強く感じました。  
子どもの頃からギリシャ彫刻を見て  
育った人たちですから、当然なのか  
もしれませんね。

日本にも金剛力士像などがあり  
ますが、多くは弥勒菩薩などの優し  
げな仏像が多く、それらを愛でる文  
化ですので、身体に対する意識も異  
なるのかなと思いました。当たり前  
のことですが欧米には欧米の、日本  
には日本の文化があります。例えば  
桜を愛でる感覚には日本独自のもの  
がありますよね。「あ、三分咲になっ  
た、五分咲になった、満開だよ」、さ  
らには、ハラハラと花が散っていく  
様子ですら「綺麗だね、川面に花び  
らが浮かんでいる、花筏だ」。こう言  
って桜を楽しむことは日本に根付い  
た文化なのです。

私は、スポーツもひとつの「文化」  
だと思っています。しかし、日本の  
スポーツ文化はまだ、本当にスポー  
ツを愛でたり、楽しんだりする文化  
になっていないのかもしれない、そ  
う考えさせられたロンドンオリンピ  
ックの取材でした。

### ロンドンの人たちのスポーツを楽しむ文化

ロンドンでは他にも驚いたこと

があります。この写真は入村式の様  
子です。



上村春樹さんや橋本聖子さんらも  
いらっしやるはずです。オリンピッ  
クでは大会期間中、各国の選手団は  
選手村に滞在します。選手団が到着  
すると入村式のセレモニーが行われ  
るのですが、大方の入村式は国旗を  
掲げてペナントのようなものを交換  
して終わります。ですが、ロンドン  
オリンピックの時は違っていました。  
ロンドンオリンピックは、私にと  
って人生で16回目のオリンピック  
取材でした。山下さんが出場できな  
かったモスクワオリンピックの取材  
から始まり、夏季と冬季を合わせて  
16回目ですが、こんな入村式は初め  
て見ました。ミュージカル仕立てに  
なっているのです。

ロンドンといえばミュージカルの  
本場ですが、日本の選手たちが華や  
かな衣装をまとったミュージカルの  
役者さんたちと一緒に、イギリスの

ロックバンド「クイーン」の曲をバ  
ックに入場してきたのです。メロデ  
イを聞けば皆さんもご存知の有名な  
楽曲をBGMに、まるで選手たちも  
出演している舞台のワンシーンのよ  
うな演出でした。思わず私は橋本聖  
子さんと「こんなの見たことないで  
すね」「本当に、初めてですね」とお  
話したのを覚えています。

ここに参加していた役者さんたち  
は恐らくトップ俳優ではなく、まだ  
下積みの方たちだったと思います。  
でもロンドンにはたくさん役者さ  
んたちがいて、ミュージカルの文化  
が根付いているのです。私がここま  
でお話している日本語の「文化」は、  
英語の「カルチャー」を訳した言葉  
ですが、人生を豊かにしてくれるも  
のを「カルチャー」と呼ぶのであれ  
ば、スポーツもミュージカルも同じ  
「カルチャー」なのです。

「カルチャー」の語源はラテン語  
の「cultura」、「cult」に由来します。  
「耕す」という意味で、そこから  
「cultivate (栽培する)」などの類  
義語が派生していくのですが、固い  
土地を耕すことによって土を柔らか  
くしていく、そこから芽も出る。要  
するに、人生をより豊かにしてくれ  
るもの、それが「カルチャー」であ  
るといふ考え方なのだと思います。



湖を踊り始めたのです。

実はこれ、ロンドンオリンピックのカルチャープログラムのひとつでした。オリンピックではスポーツ競技だけでなく、「カルチュラル・オリンピック・ピアード」という文化プログラムが行われています。ロンドンではこの活動が非常に強化され、なんと約18万件もの文化プログラムが実施されたそうです。これほど多くのイベントをどうやって実施できたのかと思われるでしょうか？ 2008年の北京オリンピックの閉会式の時に「次はロンドンですよ」と市長さんにオリンピック旗が手渡された瞬間があります。あの瞬間から「カルチュラル・オリンピック・ピアード」の期間が始まるのだそうです。つまり4年間に実施された回数なのですが、それでも大変なイベント数ですよ。

さらに、もう一つ驚いたことがあります。ロンドンオリンピックの取材では体操競技を担当してました。この写真の右上は内村航平選手の後姿だと思えます。私は誰よりも早く、競技が始まる3、4時間前には会場入りしていたのですが、試合開始の1時間半ほど前になって突然、競技のフロアーに銀色の敷物が敷かれはじめたのです。お客様の入りは3割から4割といった状況でした。



そこにバレエ団の方々が入場してくると、やがて音楽が始まって白鳥の

日本では文部科学省の下村博文大臣が「東京オリンピックでは20万件のイベントを」とおっしゃっているそうです。ですので、来年のブラジル・リオデジャネイロオリンピックの閉会式で、東京都の舛添要一知事にオリンピック旗が手渡された瞬間から始まるイベントです。すでに日本全国の市町村が「こんなことやってみたい」「こんなことやろう」と企画を考えておられるようです。

### 残念だった日本の途中退場



さて、この写真はロンドンオリンピックの開会式です。ここで週刊誌などを賑わせた事件がありました。覚えておられるでしょうか。開会式の最中に突然、日本の選手団が会場からいなくなってしまうのです。何故なら、入場行進の途中で右端の出口から退場してしまっただけです。何故、そのようなことになったのでしょうか。



実は、各国の選手団にはあらかじめアンケートが行われていて、開会

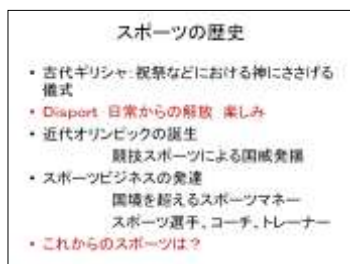
式はどの段階・時間まで参加するかも質問されていました。そこで日本は参加・滞在時間が一番短い「early departure」の項にチェックを入れたのです。それが「4分の3ほど入場行進したところで退場する」を意味する項目で、日本側はそれを正確に認識していなかったというのが真相のようです。

もし、東京オリンピックで入場行進を途中退場する国があったら、ホスト国として寂しく感じますよね。ロンドンでは日本のことを「失礼な国だ」と思った人もいるのではないのでしょうか。目前に迫る競技の準備などもあつて、開会式に選手全員が参加する訳ではないことは皆さんもご存知でしょうし、実際にロンドンでは入場した日本選手団の3分の2が役員だったようです。JOCも選手に負担を増やしたくないと考えたのでしようが、やはり勝つことやメダルを優先しての判断であったことは否めないと思います。

開会式に参加していた選手たちの中には、聖火が点火される瞬間を見たかった人も少なくなかったでしょう。オリンピックの聖火が灯る瞬間と言うのは、本当に特別な瞬間です。世界中から集まったトップアスリートが赤々と燃える炎を囲んで心

を共有する。それを体験させてあげられなかったことを残念に思います。

## ク スポーツの語源と近代オリンピック



では、ここから少しスポーツについて歴史的側面からお話しましょう。

スポーツの語源はラテン語の「deportare」にさかのぼるとされ、それが「気晴らし」や「楽しむ」を意味する古いフランス語の「desport」を経て、スポーツという言葉が生まれたとされています。古代ギリシャでは神に捧げる儀式であったものが、ラテン語を起源に日常からの解放や楽しみを意味するものへと変化してきました訳です。

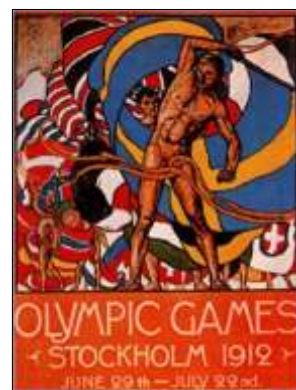
近代オリンピックが誕生した1896年は、世界はまさに植民地政策時代でした。植民地をどれだけ増やすかを競っていた時代に始まったものですから、やはり「スポーツで

も世界を征服しよう」と考えた国や、「メダルをたくさん獲って世界にアピールしよう」と国威発揚に走った国もあったかもしれません。日本にもそういう時代があったと思いますし、ソビエトなどの旧社会主義国や、現代であれば中国にもそういう側面があると思います。

さらに今ではスポーツビジネスが発達し、国境を超えてスポーツマネーが飛び交っています。それに絡んでという訳ではありませんが、選手の国籍変更の話もよく耳にするようになりました。例えば卓球では、多くの中国出身選手を各国代表として活躍しています。選手だけではなく、コーチやトレーナーも国境を越える時代です。ですから国と国との対抗戦の意味合いも考えざるを得ない情勢なのです。そしてこれからのスポーツは、いったいどこに向かって行くのでしょうか。

### 嘉納治五郎師範と日本の体育振興

日本が初めてオリンピック参加したのは、1912年の第5回ストックホルム大会でした。今日は皆さんも聴講されているのですが、この写真に写っている方が誰か分かりますか？



その時の日本選手団を写したのですが、本当にわずかな人数ですよ。この写真を初めて見た学生さんは？ おお、全員の手が挙がりました。シルクハットを手にした少し背の低い男性、実は嘉納治五郎師範です。今日は柔道関係者の方が多く参加されています。皆さんにとって嘉納師範は「柔術」を「柔道」に変えた方という認識でしょうか、実は初めて日本をオリンピックに連れて行った方であり、当時の大日本体育協会、現在の日本体育協会を創設した方なのです。



この写真は、日本体育協会の設立とストックホルムオリンピックの予選会開催に関する趣意書であり、まさに嘉納師範がお書きになったものです。ちなみに学生の皆さんは、嘉納師範が現在の筑波大学、元の東京教育大学、その前は師範学校でしたが、その校長先生をしていたというのが知っていましたか？ 今で言えば筑波大学の学長を務めておられた、つまり教育者でもあった訳です。

ここに、どのようなことが書いて

あるかという点、私も「なるほど」と思うことが記されてあります。「国の盛衰は国民の精神が充実しているか否かによる。国民の精神の充実とは国民の体力に大きく関係する。そして国民の体力は国民一人ひとり及び、関係する機関、団体などが体育、スポーツに関してその重要性をどのように認識しているかによる」と書いてあります。

学生さんのようにまだ若く、勉学に勤しんでいる年齢ではあまり感じることもないかもしれませんが、社会に出ると、仕事を集中してこなせるかどうかも本当に体力にかかってくることを実感するようになります。妙に力説してしまいましたね(笑)。

現代はIT時代となり、どれだけコンピュータを操れるかも重要になってきました。しかし、コンピュータで長時間、集中して作業できるかどうか、一日の仕事の疲れを睡眠で解消し、また次の日に元気に集中して仕事が出るかどうか、それもすべて体力が非常に重要なのです。

ましてや、嘉納師範がこれをお書きになった時代は、相次いで戦争が起きていた時代ですから、国民の体力はそのまま国力にもつながっていました。嘉納師範は教育者ですから戦争のことまで意識してお書きにな

ったとは思えませんが、いずれにしても精神が充実しているか否か、そして精神の充実が体力に大きく影響するということは本当にそのとおりだなと思います。

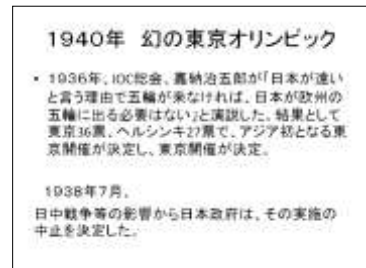
そこで嘉納師範は、「我が国の体育振興政策は欧米諸国に比べてとても劣っているので協会を設立します」という趣旨で日本体育協会をお創りになったのです。そして、「オリンピック競技大会は、世界の文化の発展と平和に貢献するものである。したがってオリンピック競技大会の参加に向けた体制を早急に整える必要がある」ということを訴え、この写真にあるように、長い文章をお書きになったのです。

現在は日本体育協会と日本オリンピック委員会(JOC)は別の組織に分かれています。昔はJOCも日本体育協会の中に取り込まれていました。

嘉納師範のこの趣意書は、「さあ、これから国民の体力を上げるために日本体育協会を創るぞ、そしてストックホルムオリンピック大会に日本は参加するぞ」という意思表示だったのです。

そして、嘉納師範は大変な苦勞をされて、1940年に東京でオリンピックを開催することを実現されました。アジアで初めてのオリンピッ

クが東京で開催されることが決まったのです。



しかしながら皆さんご存知の通り、本当に残念なことに、日本政府は日中戦争の影響からその開催を中止しました。嘉納師範が夢にまで見た東京オリンピックが幻と化してしまふのですが、やはりオリンピックは政府(政治)が「支配」しているのだという構図が明らかにあったわけです。

### 1964年東京オリンピックの遺産

そして1964年に、ようやく日本で東京オリンピックが開催されました。東京オリンピックが遺したものは、高速道路や新幹線といったインフラであると良く言われます。また、テレビのカラー放送も東京オリンピックの開会式が最初でした。前

年の1963年には日本とアメリカを結ぶ衛星放送も始まりました。そ

の最初の映像が、衛星放送を実現させたケネディ大統領の暗殺事件のニュースであったことは記憶に鮮明です。



そして、実はこのようなインフラ以外にも、オリンピックは私たちに「遺産」を遺してくれています。例えば、1963年に成立したスポーツ振興法やスポーツ少年団、かつては体育指導委員と言われ、現在は名称が変わりスポーツ推進委員と呼ばれる人々も東京オリンピックの遺産です。誕生から半世紀を経て、システムとして疲弊している部分もあるかもしれませんが、「日本の人たちが皆でスポーツを楽しもう」という意識を根付かせてくれた、今も立派に機能している後世に引き継がれた遺産なのです。

日本ではその後、1972年に冬季・札幌オリンピック、1998年には冬季・長野オリンピック・パラ

リンピックが開催され、それぞれに遺産が生まれました。ですから、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでも、今からどのような遺産を後世に遺していくのか、それを十分に意識して取り掛からなければなりません。2020年のオリンピックが閉幕した後もずっと続いていく遺産を、です。

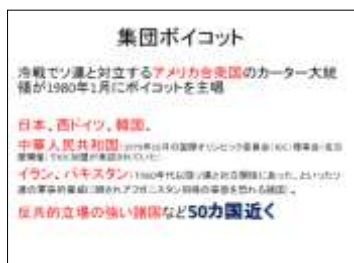
### モスクワオリンピックのボイコット

この写真は1980年のモスクワオリンピックの開会式の一コマです。マスケットだった「こぐまのミシヤ」が色カードによる人文字で描かれています。



日本がボイコットをしたため、山下さんをはじめ日本の選手が出場できなかったオリンピックです。私はこのオリンピックをテレビ朝日のアウンサーとして取材して参りました。テレビ朝日が日本での独占放送権を民放で初めて獲得していたからです。

オリンピックのボイコットは、開会式のおよそ半年前、1979年12月26日にソビエト軍がアフガニスタンに侵攻したことに端を発します。今でもあのニュースを覚えています。ソ連軍の戦車がアフガニスタンの草原に侵攻していく様子が映し出されていました。1月にはアメリカのカーター大統領が、モスクワオリンピックのボイコットを西側諸国に呼びかけたのです。



日本と韓国、そして当時の西ドイツは追随しました。ですから山下さんは柔道の日本代表に選ばれ、金メ

ダルの最有力候補とされながら出場できませんでした。



ボイコットが決まった翌日に、マランの瀬古利彦選手と中村清監督が記者会見をされました。中村監督が瀬古さんに、「オリンピックだけがレースじゃないですから、な、瀬古」と話しかけ、瀬古選手はただひとこと「はい」としか答えられませんでした。

山下さんはさらにその翌日、全日本体重別選手権に出場されました。本当に不思議な巡り合わせだと思っただけですが、山下さんはその大会で骨折の大怪我をされましたね。それからこの写真の方も金メダル確実と言われたレスリングの高田裕司選手です。このお三方が、ボイコットで辛い思いをされた象徴的な選手として、メディアに頻繁に取り上げられ

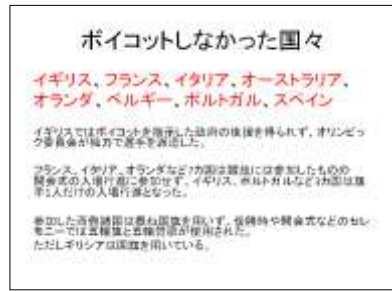
ていました。山下さんはその当時、「いえ、悔しくありません」と話しておりましたが、昨年インタビュをさせていただいたときに「実は布団をかぶって号泣した」というようなお話をされていたことが印象に残っております。さぞかし、山のように布団が震えていたのだらうなど、その思いは大変なものがあったと思います。

世界中で、そういう思いをした選手たちがいたということです。ボイコットをしたのは西側諸国だけではありませんでした。国際オリンピック委員会の中華人民共和国もボイコットしました。またアフガニスタンの周辺諸国であるイランやパキスタンもソ連への脅威から参加を取りやめ、結局50カ国近くがボイコットしたのですね。けれども西側諸国、自由主義諸国からいくつも参加した国があったことを皆さんご存知でしょうか？

### ボイコットをしなかった西側諸国

イギリス、フランス、イタリア、オランダ、ベルギー、ポルトガル、スペインなど、実はボイコットしなかった西側諸国はこんなにあるのです。アメリカの言うことには追随しなかったのですね。

イギリスはアメリカの同盟国ですから、政府は日本と同じようにボイコットする方針でした。にもかかわらずイギリスのオリンピック委員会は、「国がだめだと言っても、私たちは自分たちだけで参加します」と言って参加したのです。フランスやイタリアも参加しましたが、ソ連への抗議の意思表示は必要だということで開会式の入場行進には参加しませんでした。イギリスとポルトガルは旗手1人だけが入場行進に参加しただけです。



また、参加した西側諸国は競技で表彰台に上がっても、オリンピックの発祥の地であるギリシャ以外は国旗の掲揚をせずにオリンピック旗を用いました。

水泳の男子平泳ぎでイギリスのダンカン・グッドヒュー選手が優勝した際に、取材に当たっていた私は

インタビュを試みました。イギリスの選手たちはどういう気持ちでこのオリンピックに参加したのですかとたずねると、「僕たちはオリンピックと政治は違うものだと考えています。僕たちはスポーツの祭典に参加しました」ということを彼は答えたのです。ここで、冒頭にお話したロンドンオリンピックのハンマー投げ競技で早朝の予選会場を埋める観客の話と、桜を愛でる日本文化の話思い出してください。

やはり、イギリス、フランス、イタリアなどヨーロッパの人たちは、スポーツに対する価値観が揺るぎないのだと、すごく感じたのです。政府がボイコットを決めたところで、「私たちは参加します」とはっきり言える。スポーツに対する愛情も価値の置き方も生半可ではありません。「スポーツとは何か」という理念がしっかりと確立しているのです。翻って本日の講演のテーマですが、我々日本人は「スポーツとは何か」を分かっているようで、実は残念ながら、まだ確固たる理念は確立できていないのではないかと、私は漠然と思ってしまうのです。



この写真をご覧ください。国旗をかかげて入場してくる東ドイツと一緒に、オリンピック旗を掲げて入場している国が写っていますよね。ところがこの様子はテレビ放送では映らなかったのです。日本の放映権はテレビ朝日が獲得しましたが、映像はモスクワのテレビ局が製作していました。ですから、このオリンピック旗が入場してくる国の順番になると別のカメラに切り替えて、放送されないようにしていたのです。これはある意味で見事でしたね。映したくないものは映さない「映像の意識的なコントロール」への強い意図を感じました。

ウンサーが大量に採用されたのです。古館伊知郎さん、南美希子さん、佐々木正洋さん、吉澤一彦さん、渡辺宜嗣さんといった蒼々たる顔ぶれで、テレビ朝日にとってはボイコットで巨額の借金を背負うことになりましたが、人材は得たというわけです。

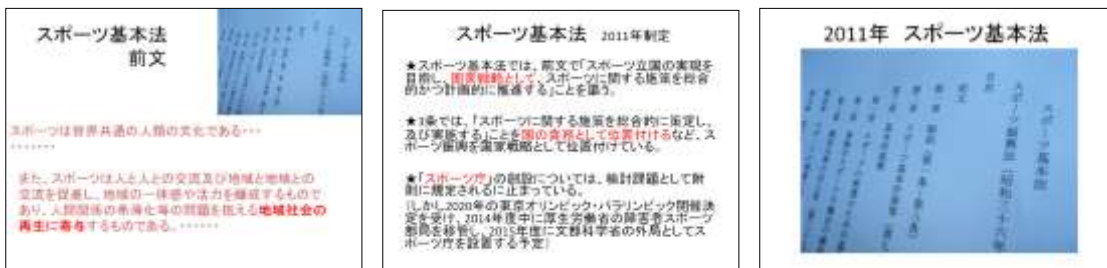


ここに写っている方が、我々を指導して下さった棟方光一さんというアフトアンションをやっておられたアナウンサーです。人材というのは本当に財産ですよ。

### スポーツと国家戦略

さて、本題に戻りましょう。皆さんは「スポーツ庁」をご存知だと思います。そのスポーツ庁がいよいよ2015年10月1日から文部科学省の外局として設置されることが決まりました。

先ほどご紹介したスポーツ振興法が全面改正され、2011年にスポーツ基本法が成立しました。



この条文の前文は「スポーツは世

界共通の人類の文化である」で始まります。先ほどから私が説明している、スポーツとは「カルチャー」であり、「人間の生活を豊かにしてくれるもの」というお話と繋がる部分です。また同時に、前文の最後には「国家戦略として、スポーツに関する施策を総合的かつ計画的に推進する」とあり、「国の責務として位置づける」中で、条文の附則に「スポーツ庁」の設置を目指すようなことが書かれているのです。

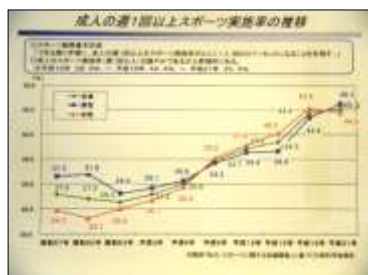
この条文に私は、良いような悪いような、とても複雑な思いを抱きました。これも、先ほどからお話しているオリンピックの事柄に繋がるのですが、国の政策の中で翻弄される選手やスポーツそのものを現場で見ってきたので、すごく難しいところがあるなど感じています。一方で今やスポーツは、トップレベルの競技力向上では、国の支援なくして他国と競い合うことは非常に難しくなっているのも現実です。

そういう複雑な気持ちを抱きながらも、このスポーツ基本法にはもうひとつ忘れてはならない視点で、スポーツ振興について記されています。それは「スポーツは人と人との交流および地域と地域との交流を促進し地域の一体感を助成するもの

であり、人間関係の希薄化などの問題を抱える地域社会の再生に寄与するものである」という一文です。実はスポーツを通じて、日本全体やさまざまな地域、地方を元気にしようという動きがかなり以前から始まっているのですが、なかなか上手く行っていないのですね。

### 日本人はどれくらい運動をしているのか

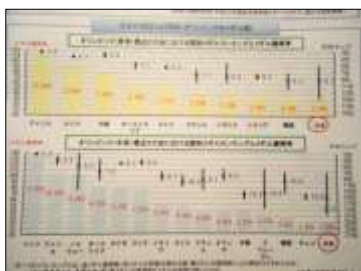
こちらのスライドをご覧ください。このデータは日本の成人のどれだけの人数が、週に1回以上運動をしているかを示したものです。



その実施率推移ですね。例えば、実際のスポーツジムでは女性の割合が多いことに気がきます。データの推移で見ると最近男性も増えていきますね。日本では男女合わせて約45%の大人が、週に一度は身体を動かしているというデータになってい

る。この数字を皆さんはどう感じになりますか？ もっと運動していると思われているか、それとももっと少ないと思っていましたか？

ところで、この同じデータで世界一スポーツ実施率の高い国がどこかお分かりになりますか？ なんとその国は、8年前に91%という数字を記録しています。2年半ほど前に取材で訪れた時には、パソコンやテレビゲームの影響からか81%に下がっていましたが、それでも凄い数字です。この国は以前、学力世界一を獲得したこともあり、世界経済競争力指数で2年連続2位という実績もあります。さてどの国でしょう。そうです、フィンランドなのです。お隣が大国・ロシアですから、フィンランド国民は「体力を養っておかなくてはならない」という認識が本にあるようでした(笑)。



次に、このデータを見ていただき



たいのですが、これは日本のスポーツ競技力を示すとも言える、オリンピックでの獲得メダル数の国別ランキングです。上の表が夏のオリンピックで、下が冬季オリンピックですね。夏はアメリカ、ロシア、中国と続いて、日本が10位でした。冬はドイツ、アメリカ、ノルウェー、オーストリア、カナダ、ロシア、イタリア、スイス、フランス、オランダ、中国、スウェーデン、韓国、チェコ、日本というように随分と下位になっています。韓国はキム・ヨナ選手の活躍もさることながらスピードスケートのショートトラックでメダルを量産しているからでしょう。

ところが、このデータを見てもフィンランドは見当たりません。成人の運動実施率が91%もある国なのに、です。実はフィンランドも以前はトップレベルで選手強化に取り組んでいたのですが、ある問題の解決に向けて政府が方針を転換し、競技力の向上ではなく国民一人ひとりにスポーツ活動を促す大キャンペーンを展開したのです。

その問題と言うのは自殺率の高さです。20世紀までフィンランドは世界でも自殺率の高い国でした。気候や環境も影響してか、うつ病患者やアルコール依存症患者も多く、国

民の健康問題や国家としての競争力などを危惧した政府が、国民が皆でスポーツに参加できるように、さまざまな取り組みをスタートさせたのです。その中で、独特な面白みのある新しい競技も生まれました。

ということ、ここでVTRを見ていただきたいと思います。2013年5月7日にテレビ朝日・報道ステーションで放送されたものです。私がこの取材でフィンランドに行っていたのは、柔道女子の日本代表選手たちに暴力問題があつて、全日本柔道連盟が対応に追われていた3月ごろです。それではご覧ください。

### フィンランドの取り組み

#### 《映像の音声》

「日本オリンピック委員会がトップアスリートとコーチを対象に行ったパワハラ、セクハラに関する調査では、暴力を認識していた指導者が3割近くおり、選手からは競技をやめたい、今でもトラウマとして残っている、などの生々しいコメントが寄せられました。スポーツ界では暴力を根絶させるための様々な動きが起きています。いま日本のスポーツが大きく変わるチャンスでもあるのです。変わるヒントは意外なところにありました。フィンランドは学

力でも経済競争力でも世界のトップクラスとして知られています。スポーツでも世界一なのです。スポーツ実施率調査によれば、1週間に3日以上スポーツや運動をする人が全体の52%、週に1日以上スポーツする人は80%に上ります。

『昨日はスキー、そして今日はスケートをしています。』

『今シーズンにはスキーで1300キロ滑りました』

『私も息子もアイスホッケーのクラブに入っていて毎日スポーツをしています』

『毎日、ほぼ毎日です。健康のためにも頭をクリアにするためにも大切です』

フィンランドではスポーツが一人ひとりの生活の中に根付いているのです。日本の場合はどうでしょうか。明治5年に学制が發布されて以来、日本のスポーツは学校体育という特殊な形で発展してきました。第二次世界大戦終了までの70年間、体育は富国強兵のための教科として位置づけられ、軍隊的な上下関係や指導者への服従などが基本とされてきました。スポーツ界における暴力問題は日本の体育が歩んできた歴史から生じてきたとも言えるでしょう。フィンランドの中学校で体育の授業

を覗いてみました。教えているのは体育専門のユハ・ヒマネス先生です。

『暴力や脅迫を生徒にうまくやらせるために使う。恐ろしい。子供が自発的にやりたいのではなく、コーチがやりたいのですね』

一般的に、子どもたちは放課後、地元のクラブで好きなスポーツを行います。ですから学校の授業では子どもたちにスポーツに対する興味を持たせるのが目的になってきます。

『教える目的はアクティヴなライフスタイルを見つけることだと思っています。健康のためのスポーツと競技のスポーツの2つがあり、誰もがトップアスリートになれるわけではないけれど、誰もがアクティヴになれる』

中学の保健体育の教科書には、日本の体育大学で学習するような詳しい内容も含まれており、アクティヴで健康的な生活の大切さが記されています。フィンランドの国技はベサパッコと呼ばれるフィンランド野球です。プロリーグもあり、将来はプロになりたいという夢を抱く子どもたちも少なくありません。体罰の代わりにあるのは専門コーチによる言葉での丁寧な説明です。

『他にも様々なスポーツをするように勧められています。フィンランド

野球はスピードとパワー、さらに戦術が必要だからです』

たくさんのスポーツを行うように指導する一方、欧米の常識として16歳以下の全国大会が開かれることはありません。いずれも子どもたちの発育を考慮してのことです。日本ではまだ意志の定まらない子どもに、一つのスポーツだけで全国大会を目標にさせることが少なくありません。指導者自身が勝ちたいと思いません。あまりに、勝利至上主義から暴力が生まれることもしばしば、でした。

一方、フィンランドの競技スポーツはどうなっているのでしょうか。

フィンランドは1920年代にパーヴォ・ヌルミ、1970年代にラッセ・ビレンといった名選手を生み出してきた(陸上の)長距離王国でしたが、アフリカ勢が台頭するようになって以来、その面影はありません。1980年代最強のジャンパーと言われたニッカネンが引退後、アルコール依存と傷害事件の常連となってしまうことや、2001年に地元開催されたノルディック世界選手権でフィンランド選手に組織的なドーピングが発覚。以来、競技スポーツに対する信頼が薄れ、政府からの財政援助も激減してしまいました。資金難で選手強化は進まず、国

際大会での成績も奮いませんが、きっと将来はいい選手が出てくるはずとジャンプ競技の人気は今でも衰えを知りません。するスポーツ、見るスポーツ、すべてが好きなフィンランドの人々です。

『うわー、軽いです。これが今10代から20代のフィンランドの若者に一番人気のあるスポーツだそうです。フロアボールの人気の秘密は手軽に始められてアイスホッケーのように激しくさらに一年中できることです』

『日本人はスポーツと言えばオリンピックで、それがすべてであり、重要なことだと思っています。フィンランドでは違います。フロアボールはオリンピック種目ではありませんが、とても人気があります』

こう話すメリカントさんはクロスカントリースキー日本代表コーチなどとして十数年を日本で過ごしてきました。『日本のスポーツトレーナーはトレーニングのことばかり一生懸命考えていました。楽しむことをまったく考えていませんでした』

楽しくなければスポーツじゃない。スポーツの語源は中世フランス語のレスポルト、気晴らし、楽しむという意味です。今、マイナス15度です。どんなに寒くてもみんなでワ

イワイ楽しんでしまうのがフィンランドの人たち。仲間と距離がグッと近くなるコーヒータムです。女性のための素敵なレースがあります。ナイスティンクンピは競うレースではなくタイムも測りません。歩いても休憩してもオーケー。みんな10

キロを楽しむことが目的で、30周年の今年はヨーロッパ各地から2万人が集まる予定です。スワップサッカー世界選手権もこの10年で人気上昇中。このどろんこサッカー、子ども

の頃に返って無心でボールを追いかける楽しさが受けています。こちらにも今やフィンランド名物となった奥様運びレース世界選手権。見た目は奇抜な障害物レースですが、参加者たちは真剣にトレーニングを積んでいるとか。フィンランドの人々が健康のために日常行っているアバン

ト水泳、凍った湖に穴を開けた寒中水泳です。あー、冷たい。よくこんな中に入る。2月にこの寒さの中、早さを競う世界選手権も行われているのです。

フィンランドのスポーツに共通しているのは、一人ひとりが自分の力に応じてアクティヴに楽しんでいることです。どうしてここまでスポーツや運動が浸透してきたのか。スポーツ医療で世界をリードするユバ

スキュラ大学で聞いてみました。

『我々は国をあげて人々がアクティヴになれるように広くキャンペーンを行ってきました。現在、国内外の学会では身体活動が脳に及ぼす影響がいかに重要か、研究が進められています』

フィンランドではどこにいても子どもたちが外で遊んでいます。運動することの効果を感じて、子どもと知っているからです。スポーツ界の暴力に対する考えを伺ってみました。

『なにより相手をもつと尊重することが求められています。スポーツなら暴力が許されるというのではなく、スポーツも一般社会と同じ基準で判断されなければいけないのです』

### 《映像終了》

### 子どもたちの将来のために

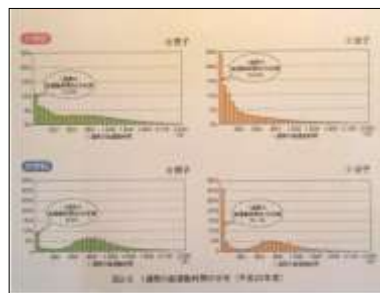
いかがでしたでしょうか。フィンランドの人たちは生活の中で、身近にスポーツを楽しんでいるということがお分かりになったと思います。そして私はこの取材を通じて、国がどういう政策を取っていくかによって、スポーツのあり方もまったく方向性が変わるのだという顕著な例を見たような気がしました。

フィンランドは国民の20%が何らかのスポーツクラブに所属して運動を楽しんでいます。そして10%の国民がスポーツに関連したボランティア活動に参加しているのです。スポーツの多くは仲間や手助けをしてくれる人、ある程度の環境がないと続けることが難しいので、国民が皆でそういうことにも積極的に参加しているということなのでですね。

余談ですが、日本の病院でもスポーツや運動でうつ病を治す試みがあります。先日、早稲田大学の駅伝選手として箱根の山登りで活躍されたマラソンの金哲彦さんにお会いした時に、「最近ね、1カ月に1度くらい割合で精神病院に行っているんだ」と言うので、「どうしたの」と聞くと、「うつ病治療の指導で」とのことでした。「皆さん本当に元気になって、うつむいて下ばかり見ていた人たちが、だんだん顔が上がってくるんだよね」ということを話していました。やはり運動の効果というのは、そういうところでも顕著に見られるのです。

さらにこの数字も見ていただきたいのですが、これは日本の子どもたちの1週間の総運動時間です。小学校と中学校の男女別のデータで、女子中学生の総運動時間では、30%が

週に60分未満しか運動していないというデータが出てきました。これは体育の授業を除いた時間なので、全国の女子中学生の3割が、1日平均10分も運動していないということになるのです。



これには危機感を覚えます。将来を担う子どもたちが、ましてや赤ん坊を産み、育てる女性たちが中学生の段階でこの運動量というのは問題ではないでしょうか。これをどうやって改善していくのか。10月にスポーツ庁が発足し、山下さんが長官に就任されたら、ぜひ対策に取り組んでいただきたい。オリンピックのメダルも大切ですが、個人的にはこちらの方が大問題だと考えております。皆さんの頭の片隅にもぜひ留めておいていただきたいことです。

### 新しいスポーツを受け入れて

今日ご参加の皆さんはスポーツ関係者ばかりだと思うので、女子中学生のお子様や知り合いの方が周囲におられるとすれば、「そんなに少ないことはない、もつと運動している」と思われるかもしれません。でも男子中学生でも9.3%が週に60分未満なのです。本当に大変な時代になっています。ではこういう子どもたちがどうやって運動をさせるのか。やはり人気のスポーツを紹介していくこともひとつの手段だと思います。

今、女の子に人気があるのはチアリーディングです。中には「それはスポーツではないでしょう」と感じる方もおられるかもしれませんが、ですが、とにかく身体を動かすことが先決なのです。特に女の子は仲間と一緒にやるスポーツを好む傾向にあるようなので、仲間と音楽に合わせて身体を動かすチアリーディングは人気です。

いわゆるダンスで言えば、他にも「よさこい」などがあります。中学校の必修科目に武道とダンスが加わりましたが、武道が苦手という子どもでも、ダンスなら出来そうだと思います。ダンスなら出来そうだと思います。ダンスなら出来そうだと思います。ダンスなら出来そうだと思います。

さらに、スポーツもどんどん新し

い種目が生まれてきていて、オリンピック種目にも採用されるようになりました。いわゆる「Xスポーツ」といわれるジャンルのものが若者に人気です。

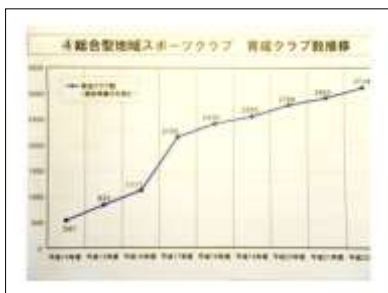
スケートボードや自転車のBMX、壁を登るボルタリングなどがそうです。中でもスケートボードはオリンピック種目になりましたよね。昔であれば「不良」がやる遊びと思われていたものが、格好いいスポーツとして認識されるようになってきました。



こういう新しいスポーツを受け入れて、子どもたちに、身体を動かす楽しさや大切さに気づいてもらえたらと思っています。とにかく、身体を動かすことが先決なのです。

**地域に密着したスポーツクラブの振興を**

もうひとつ大切な視点に、地域に密着したスポーツ活動があります。総合型地域スポーツクラブという言葉をご存知でしょうか？平成7年から文部科学省が推進している事業で、平成22年には全国で3500の総合型地域スポーツクラブが活動するようにになりました。私も関わっているのですが、これが地域を元気にしてくれています。



全国で1町村に1カ所は作りましょうという計画で、およそ7割が達成しているそうです。大規模な市町村合併がありましたから、それを差し引けば本来の目標にはまだまだ到達できていないのではと思うのですが…。

先ほどフィンランドのお話で紹介したスワップサッカーやどろんこサッカーなど、日本でもいろいろなさスポーツを地域で楽しむようになって

ています。



この写真は「いわて・あきた県境国取り合戦」の様子です。岩手県と秋田県の県境で、毎年綱引きで県境を決めています。今年は5センチ岩手側に入った、秋田側に入ったと皆さんが楽しみながら身体を動かしています。



こちらは岡山県久米郡にある柵原星の里スポーツレク倶楽部が実施している「泥んこ運動会」の様子です。ここでは「どろんこバレーボール大会」などを開催していて、大阪など

関西はもちろん海外からも参加者があります。わざわざ海外から参加しにやってくるということが面白いですし、やはり外国の方は人生を楽しみ、遊び心があるのだなと感じました。

### 障がい者のスポーツに対する視点

そして絶対に忘れてはならないのが、障がいのある方たちへのスポーツの振興です。ちょうど昨日(5月26日)、「日本障がい者スポーツ協会」が50周年の式典を開催されました。日本ではこれまで、障がいのある方たちや、そのご家族への理解が欧米に比べて遅れていたと思います。しかし多くの関係者のご努力によって、徐々にではありますが環境も変わってきたのではないのでしょうか。近年では、障がいのある方でも楽しめるスポーツが、いろいろと行われるようになってきました。



これはゴールボールの写真ですね。目の不自由な方たちが、鈴が仕込まれたボールを使って行うサッカーのようなスポーツです。実はなかなかハードなスポーツで、元体操選手でオリンピックメダリストの池谷幸雄さんにも体験してもらったのですが、身体を慮だらけにして「これは難しい」と話しておられました。

そして、お話は繋がっていくのですが、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの成功は、まさにこのパラリンピックの部分にかかっているのではないかと私は考えています。ここで、インターネットのYOUTUBEで公開されている動画をご覧頂きます。実はロンドンパラリンクが行われる際のPR動画で、YOUTUBEだけで130万回以上再生されている動画です。「Meet the Superhumans」というタイトルです。

### 映像公開

いかがだったでしょうか。ロンドンではこういうPR画像が頻繁に放送、視聴され、パラリンピックの競技場が観客で満員になりました。私がパラリンピックの取材を始めたのは1996年のアトランタパラリンピックからで、今日まで続けてきて

思うのですが、アトランタもシドニーも、長野のパラリンピックでも、取材者である私の方がすごく元気をもらえるのですね。

身体に不自由があってもそれを恐れず、生きることと挑んでいく選手たちの姿を見ていると、勇気やパワーが湧いてくるのです。ですから、パラリンピックの取材を体験したスタッフは必ず「また行きたい」と言い出します。東京都の職員の方にも伺ったのですが、毎年、国民体育大会に続いて開催される「全国障害者スポーツ大会」にスタッフで参加した職員の方たちも、「またやりたい」とおっしゃるそうです。

「身体に障がいがあるのに、なぜわざわざスポーツをやるのだろう」と考える人がいるかもしれません。けれど、それは間違いです。身体に不自由がある方も、出来るだけ自力で暮らしていかなくてはなりません。例えば車椅子で生活している人でも自力でベッドに上がり、トイレに座らなくてはならないのです。その時に不可欠なのが腕力であり、身のこなしであり、体力なのです。それらを鍛えるためにもスポーツは大変に有効であり、自分の生活に直結する問題なのです。

2020年の東京オリンピック

ク・パラリンピックでは、実施に当たって3つの柱が提示されています。その一つが「ダイバーシティ」という概念で、多様性を認めていこうという考え方です。この方針にそって、障がいのある方たちへの理解が国内でもっと深まってくれることを心から願っています。パラリンピックによつて日本の人々たちの考え方が変わっていくことがとても大切なのだと思っっているのです。

### 鳥獣戯画に見る日本のスポーツ史



さて、講演時間も残り少なくなってきました。突然ですが、この写真は有名な鳥獣戯画です。いま上野にある東京国立博物館で「京都・高山

寺の至宝」と題して鳥獣戯画の特別展が開かれています。ご存知だと思いますが大変な人気です。実は私の夫が京都の出身なのですが、夫の実家を訪ねてもあまり寺社めぐりをしなかつたのです。それで「どこか良いところはないかしら」と思案していたら、義理の父に「高山寺がいいから行ってごらん」と薦められたのが12、3年前のことでした。

それで出かけてきたのですが、こんなに素晴らしいものがあるとは思いませんでした。高山寺で公開されているのはレプリカですが、それでも私が見ていて気がつき、身体がフリーズして固まってしまったことがらを紹介したいと思えます。この写真はよく目にする絵で、ウサギさんが泳いでいる様子です。こちらの絵は何をしているかお分かりになりますか？ そうです。弓矢です。ヨーロッパで言うとスイミングやアーチェリーをやっている。こちらは相撲でしょうかレスリングでしょうか。道着を着ていたなら柔道ですね。

鳥獣戯画の「戯」という漢字は「戯れ(ざれ)」という字です。これを英語で言うと「PLAY」ですし、フランス語で言うと「JOUER」なのですが、つまりは「遊ぶ」という意味

で、日本もヨーロッパも同じなのだと思うわけです。「やった、やった」「投げた、投げた」と喜んでる絵なのでしょう。

実はこの鳥獣戯画は、甲・乙・丙・丁の全4巻構成です。私がいづも目にするのは動物を擬人化した甲巻なので、今回の特別展では4巻全てを公開していると知って、とても嬉しかったですね。学生の皆さんは読み方を知っていましたか？ 昔は成績表も甲・乙・丙・丁の4段階でつけられていたのですよ。一番良いと甲、一番だめだと丁でした。

この丁巻に、流鏝馬(やぶさめ)の様子が出てきます。鳥獣戯画は平安時代から鎌倉時代にかけて描かれたと言われており、甲巻を描いた人と丁巻を描いた人は違うと言われています。独楽を楽しんでいる様子や、楽器を演奏している様子など、日本人が大好きな歌舞音曲の絵もある一方で運動の絵もたくさんある。

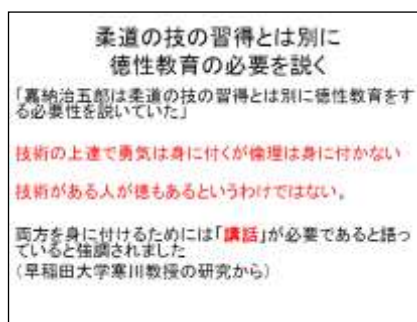


これは棒で球を打っている様子のように見えますよね。三杖絵といふのですが、ホッケー協会の方がいつも自慢気に「ほらね、ホッケーは昔から行われていたのですよ」と話をされています。平安時代や鎌倉時代から、雲の上から地上を見下ろしたような絵巻物はたくさんあって、私が「発見」した訳ではないですが、現代のスポーツを思い起こさせる「遊び」が日本でも行われていたことに気がつくわけです。

スポーツは明治時代になって欧米から入ってきたように思われがちですが、昔から庶民の遊びや貴族の遊びとして日本にもあったのです。蹴鞠のように身体を動かして遊ぶことは昔からありました。こちらにはキャッチボールのような絵もありますね。先ほどの三杖絵に関しては、その名残が、薩摩地方で引き継がれてきた「破魔投げ」にも見られるようです。皆さん大名の袴のような衣装を着て、伝統芸能のように遺されているとも伺いました。日本でも昔から、身体を動かして楽しんでいたわけです。

### 嘉納治五郎師範の徳性教育

そして最後に、再び嘉納治五郎師範のお話に戻ります。



冒頭に山下さんからご紹介がありました。私は山下さんにお誘いを受けて、柔道に関するいろいろとお手伝いをさせていただく中で、本当にたくさんのお話を聞かせていただきました。特に印象に残っているのは、嘉納師範が柔道の技の習得とは別に、徳性を涵養する教育の必要性を説いておられたことです。

嘉納師範によると、「柔道が強くなったからといって、自然と品位が備わるわけではない」ということで、「技術の上達で勇氣は身に付くが、倫理は身につかない」「技術がある人が徳もあるというわけではない」というお話です。これは、嘉納師範がご自分でお書きになっています。

### 柔道は人間教育である

スポーツ人類学がご専門で、自らも柔道家である早稲田大学の寒川恒夫教授のご研究によれば、嘉納師範は「技と品位の両方を身に付けるためには『講話』が必要である」とおっしゃったとのこと。寒川と書いて「そうがわ」とお読みするのですが、この分野の研究で第一人者の先生がおっしゃることなので、大変興味深く受け止めました。

昨今の柔道界に指摘されるさまざまな課題は、いつしか日本の柔道が勝利至上主義となり、技術の上達に力を入れすぎたために、どこかで倫理教育、徳性教育がおざなりになってしまったからかもしれません。これはあらゆるスポーツに通じることではないでしょうか。スポーツには相手に対するリスク、敬意が不可欠です。握手、あいさつ、ありがとうという気持ち。相手がいるからこそ自分はスポーツが出来るのだという思い。人と人との交流が人間性を高めていくのでしょう。柔道が大変な人気スポーツであるフランスでは、子どもたちにきちっとした礼儀を身に付けさせるためにやるという話も聞いていますし、私も日本の子どもたちにそういうお話をしています。



こうした考え方や活動がいま、静かなムーブメントになりつつあるのですが、まだまだいろいろなお問題が起きています。この写真をご覧ください。柔道界から暴力を根絶するプロジェクトを展開していたときに作ったポスターです。「柔道は人間教育」というコピーが印刷されています。次に「柔道マインドプロジェクト」に変わって、このようなポスターを制作しました。マインドの「I」はマナー、礼節です。「I」はインディペンデンスで自立を意味しません。「N」はノビリティで高潔、「D」はデイグニティで品格といたしました。



そしてこれが活動などを紹介する雑誌なのですが、皆さんお読みになっておられますか？ すごく素敵な雑誌です。私もこの内容を見て、「ああ、いいな」と思っているのですが、ぜひ指導者の方や選手の方にも読んでいただきたいと思いました。こういう雑誌をお読みいただくことも、徳性教育ではないかという気持ちになりました。



それから、こちらが今日皆さんにお配りした、2週間ほど前に出来たばかりの冊子です。私が所属しています全日本柔道連盟のコンプライアンス委員会で作成した、暴力や体罰、セクハラ問題を防ぐためのガイドブ

ックです。「柔道は人間教育である」ということで、暴力やセクハラの実例が示され、なぜいけないのかが解説されています。ぜひ指導者の皆様にご一読をお願いしたいと思います。

私が、ある地方のお弁当屋さんから実際に聞いて、とても悲しい思いをしたお話があります。さる柔道関係者からの注文内容があまりに理不尽で、価格的にも折り合わない旨を伝えると、「俺の名前を知らないのか」と一喝され、さらに大会のプログラムに広告の提供を求められたと言うのです。別の方からも同様の話を伺ったので、信憑性の高い話で、これではまるで脅迫だと思いました。こういうことがまかり通るようでは、親御さんにしてみたら、「うちの子に柔道をさせよう」という気持ちにはならないですよ。やはり、関係者の皆さんには普段から注意をいただかないと、社会の理解は広がっていかないだろうと思います。

### 最後に

今日は「今考えよう、スポーツって何？」というテーマで、お話がとても多岐に渡ってしまいました。皆さんにぜひお考えいただきたいことばかりをお話しました。スポーツは文化であり、欧米と日本の考え方

にはやはり差があるということ。また、オリンピックをはじめ、スポーツ振興には国の政策が影響するということ。メダルを獲得したいという国の指針やそれに応えたいと考

える競技団体がある一方で、国民の健康を考えてもっとスポーツを普及したいという現状もあるということ。そこには女子中学生の3分の1が週に60分も運動をしないという現実があるのです。

こうした現状の中で日本はどういう方策を、どのように図っていくか。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの先も見据えて、それぞれの方々に考えていただけたら良いのかなと思っています。今日はいろいろな側面からお話をしましたが、皆さんの心の中でそれぞれが組み合わさり、立体的になる日が来ることを願って止みません。本日の私のお話は以上です。ありがとうございました。

### 司会

宮嶋さん本当にありがとうございます。皆様がスポーツについて思索を深められたことと拝察いたします。ここで会場から質問をお受けしたいと思えます。いかがでしょうか？ 山下理事長から挙手がございますが、お願いしてよろしいです

か？ では山下理事長、質問をお願いいたします。

**山下理事長**…ご講演、本当にありがとうございました。

実は2年半ほど前に、文部科学省の会合で宮嶋さんと同席したことがありました。鈴木寛さんが文科省の副大臣を務めておられた頃で、その場で宮嶋さんが、私が言いたいと思っていたことの3分の2くらいを話してくださったことがありました。今日のお話でも、宮嶋さんが考えておられる「スポーツのあり方」と、私の考え方が極めて近い、ということを改めて強く感じた次第です。

私は日本オリンピック委員会の理事を務めております。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、理事として日本の選手が活躍できるように努力をすることはもちろんですが、同時に、スポーツ全体の裾野を子どもたちからお年寄り、身体の不自由な方にまで、さらに拡げて行かなくてはならないのだと実感しました。この両方を達成してはじめて、オリンピック・パラリンピックの「成功」だと言えるのです。皆様に全力を尽くすことをお誓いし、質問に移らせていただきます。

私は、フィンランドのお話が非常に興味深かったのですが、国民がスポーツを身近に実践することで健康が促進され、自殺者の減少だけでなく医療費の削減にもつながったのではないかと思うのですが、こうした点でフィンランドではどのような変化があったのか、教えていただけないか。

**宮嶋**…ご質問ありがとうございます。例えば、皆さんのご自宅から病院まではどれくらいで行けますか？日本であれば、よほどの地域でない限り、車で30分も走れば病院がありますよね。ところがフィンランドでは、3時間くらい走っても病院に行き着くかどうか分かりません。ですから、自分の健康は自分で守らなければならぬのです。フィンランドの人たちには普段から、自己管理の考え方が染みついていきます。もちろんヘリコプターなど救急搬送の様々な社会システムもありますが、風邪をひいたくらいでは病院に行きません。私がフィンランドに着目した最初のポイントは、出産に対する国の対応です。女性が妊娠して、臨月の前の月になると、妊婦のもとに大きな箱が送られてきます。中には出産用品、育児用品が一式全部入って

るのです。その箱さえあれば、経済的に生活が苦しい人でも出産が出来る。中には、マイナス15度の外気にも耐えられるようなベビー用の防寒着まで入っているのです。フィンランドは冬の寒さが厳しい国ですが、赤ちゃんの頃から外に出て「皮膚を強くしましょう」という発想のようなのです。実はこの箱、日本でも、フィンランド大使館の関係機関から購入できます。ムーミンがデザインされた箱もあるそうで、出産を控えた私の友人が購入したところ、日本向けの箱にもその防寒着が入っていたそうです。さすがに日本では使う機会が無かったそうですが。

実はそれが、私がフィンランドの研究を始めたきっかけでもあったのです。確かにフィンランドは喫煙率や飲酒率が高く、自殺率も多い時代がありました。しかし、国を挙げてスポーツに取り組み、赤ん坊の頃から自然の中で活動する習慣を育み、大人になっても親しめる環境を整えたことで、そうした問題も改善されていっていますし、医療費も相当に減少しているようです。これでお答えになつていきますでしょうか。

**司会**…宮嶋さん、どうもありがとうございます。それでは、時間も迫

って参りましたので、以上で講演会を終了いたします。宮嶋さんにもう一度大きな拍手をお願いいたします。

\* \* \*

柔道教育ソリダリティーのバックナンバー講演録をご要望の方は、事務局0463(58)1211(内線3524)までご連絡下さい。講演録は、無料で配布しております。また、ホームページからもダウンロードすることが出来ます。

【<http://npo-jks.jp>】